

2020年度 東京大学 理科 数学 解答例

第1問

$$ax^2 + bx + c > 0 \quad \dots\dots ①$$

$$bx^2 + cx + a > 0 \quad \dots\dots ②$$

$$cx^2 + ax + b > 0 \quad \dots\dots ③$$

とする.

(1)  $a < 0$ であると仮定すると

$$\lim_{x \rightarrow \infty} (ax^2 + bx + c) = -\infty$$

であるから、 $x > p$ である十分大きな $x$ で①を満たさないので不適.

同様に、 $b < 0, c < 0$ と仮定したときも、それぞれ②, ③を満たさないので不適.

以上より、 $a, b, c$ はすべて0以上である.

(2)  $abc \neq 0$ であると仮定すると、(1)より $a > 0, b > 0, c > 0$ である.

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} (ax^2 + bx + c) = \infty$$

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} (bx^2 + cx + a) = \infty$$

$$\lim_{x \rightarrow -\infty} (cx^2 + ax + b) = \infty$$

であるから、 $x \leq p$ である十分小さな $x$ で①, ②, ③をすべて満たす.

よって、①, ②, ③をすべて満たす実数 $x$ の集合は $x > p$ 以外にも存在するので不適.

以上より、 $a, b, c$ のうち少なくとも1つは0である.

(3)  $a, b, c$ がすべて0に等しいとき, ①, ②, ③はそれぞれ

$$0 > 0$$

となり不適であるから,  $a, b, c$ のうち少なくとも1つは正である.

$a$ が0に等しいとき, ①, ②, ③はそれぞれ

$$bx + c > 0 \quad \dots\dots ①'$$

$$bx^2 + cx > 0 \quad \dots\dots ②'$$

$$cx^2 + b > 0 \quad \dots\dots ③'$$

となる. ①'より, ②'の解は

$$x > 0$$

となる.  $b, c$ のうち少なくとも1つは正であるから, これは①', ②', ③'をすべて満たすので

$$p = 0$$

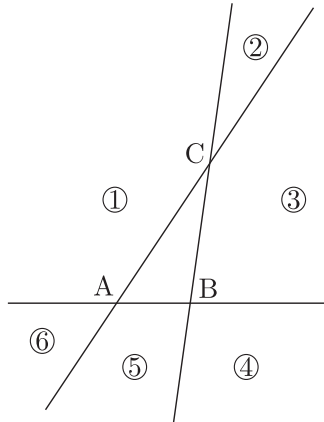
である.

$b$ が0に等しいとき,  $c$ が0に等しいときも同様に  $p = 0$  である.

以上より,  $p = 0$  であることが示された.

## 第2問

Xが $\triangle ABC$ の周および内部にある場合、 $\triangle ABX + \triangle BCX + \triangle CAX = 1$ なので条件を満たさないことに注意して、平面を以下のように6個の部分に分ける。



(i) ①の場合

直線 AC と平行な直線上に点 X があるとし、点 B と直線 AC との距離を  $h$ 、点 X と直線 AC との距離を  $kh$  とおくと

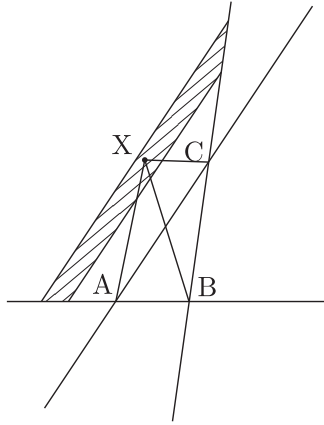
$$(\triangle ABX + \triangle BCX) + \triangle CAX = (1 + k) + k$$

より

$$\frac{1}{2} \leq k \leq 1$$

よって、下図よりこの部分で X が動きうる範囲は下図斜線部となり、その面積は

$$2^2 - \left(\frac{3}{2}\right)^2 = \frac{7}{4}$$



(ii) ②の場合

直線 AB と平行な直線上に点 X があるとし，点 C と直線 AB との距離を  $h'$ ，C を通り AB に平行な直線と点 X との距離を  $kh'$  とおくと

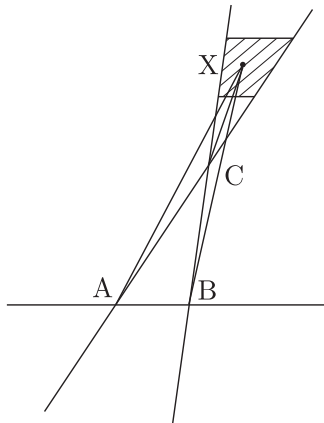
$$\triangle ABX + (\triangle BCX + \triangle CAX) = (1 + k) + (1 + k - 1)$$

より

$$\frac{1}{2} \leq k \leq 1$$

よって，下図よりこの部分で X が動きうる範囲は下図斜線部となり，その面積は

$$1^2 - \left(\frac{1}{2}\right)^2 = \frac{3}{4}$$



(i), (ii) と対称性より ①, ③, ⑤ および ②, ④, ⑥ はそれぞれ同様な形になるから, 求める面積は

$$3\left(\frac{7}{4} + \frac{3}{4}\right) = \frac{15}{\underline{\underline{2}}}$$

である.

### 第3問

$$(1) \frac{y(t)}{x(t)} = \frac{3\sqrt{1-t}}{\sqrt{1+t}} \text{ より}$$

$$\begin{aligned} \frac{y(t)}{x(t)} &= 3\sqrt{\frac{1-t}{1+t}} \\ &= 3\sqrt{-1 + \frac{2}{1+t}} \end{aligned}$$

となり、分数関数  $-1 + \frac{2}{1+t}$  は単調に減少するので、 $-1 < t \leq 1$  において  $\frac{y(t)}{x(t)}$  は単調に減少する。

(2)

$$\begin{aligned} f(t) &= \sqrt{\{x(t)\}^2 + \{y(t)\}^2} \\ &= (1+t)\sqrt{(1+t) + 9(1-t)} \\ &= \sqrt{2}(1+t)\sqrt{5-4t} \end{aligned}$$

である。したがって、

$$\begin{aligned} f'(t) &= \sqrt{2} \left\{ \sqrt{5-4t} + (1+t) \cdot \frac{-2}{\sqrt{5-4t}} \right\} \\ &= \frac{3(1-2t)\sqrt{2}}{\sqrt{5-4t}} \end{aligned}$$

であるから、 $-1 \leq t \leq 1$  における  $f(t)$  の増減表は右のようになるので、 $f(t)$  は  $t = \frac{1}{2}$  のとき最大値

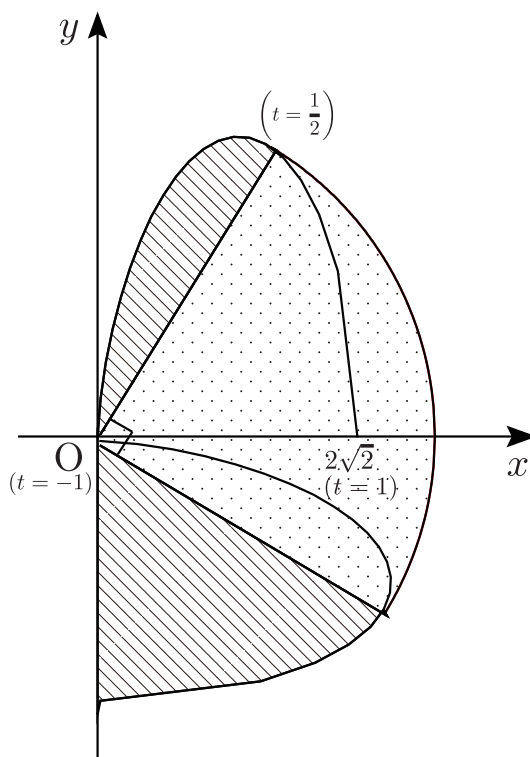
$$f\left(\frac{1}{2}\right) = \sqrt{2} \cdot \frac{3}{2} \cdot \sqrt{5 - 4 \cdot \frac{1}{2}}$$

$$= \frac{3\sqrt{6}}{2}$$

$t$	-1	...	$\frac{1}{2}$	...	1
$f'(t)$		+	0	-	
$f(t)$	0	↗	最大	↘	$2\sqrt{2}$

をとる.

(3)  $-1 \leq t \leq 1$  において  $x(t) = (1+t)^{\frac{3}{2}}$  が単調増加であることと (1), (2) より,  $D$  を, 原点を中心として時計回りに  $90^\circ \left(= \frac{\pi}{2}\right)$  回転させたとき, 通過する領域は右図の斜線部および打点部分である.



したがって、斜線部分の面積は

$$\begin{aligned}\int_{-1}^1 y dx &= \int_{-1}^1 3(1+t)\sqrt{1-t} \cdot \frac{3\sqrt{1+t}}{2} dt \\ &= \frac{9}{2} \int_{-1}^1 (1+t)\sqrt{1-t^2} dt \\ &= 9 \int_0^1 \sqrt{1-t^2} dt \quad \left( \sqrt{1-t^2} \text{は偶関数, } t\sqrt{1-t^2} \text{は奇関数より} \right)\end{aligned}$$

ここで、 $\int_0^1 \sqrt{1-t^2} dt$  は、半径が 1 で中心角が  $\frac{\pi}{2}$  の扇形の面積に等しいから

$$9 \int_0^1 \sqrt{1-t^2} dt = \frac{9}{4}\pi$$

である。また、打点部分の面積は、半径が  $\frac{3\sqrt{6}}{2}$  で中心角が  $\frac{\pi}{2}$  の扇形の面積だから

$$\frac{1}{2} \cdot \left( \frac{3\sqrt{6}}{2} \right)^2 \cdot \frac{\pi}{2} = \frac{27}{8}\pi$$

である。ゆえに、求める面積は

$$\frac{9}{4}\pi + \frac{27}{8}\pi = \frac{45}{8}\pi$$

である。



#### 第4問

(1)  $(2^0 + 2^1 + 2^2 + \dots + 2^{n-1})^2$  を計算すると,

$$(2^0 + 2^1 + 2^2 + \dots + 2^{n-1})^2 = \left\{ \frac{1 \cdot (2^n - 1)}{2 - 1} \right\}^2 = 4^n - 2^{n+1} + 1$$

である.

ここで,  $(2^0 + 2^1 + 2^2 + \dots + 2^{n-1})^2$  を展開すると,

$$\begin{aligned} & (2^0 + 2^1 + 2^2 + \dots + 2^{n-1})^2 \\ &= (2^0 + 2^2 + 2^4 + \dots + 2^{2n-2}) \\ & \quad + 2(2^0 \cdot 2^1 + 2^0 \cdot 2^2 + 2^0 \cdot 2^3 + \dots + 2^0 \cdot 2^{n-1} \\ & \quad \quad + 2^1 \cdot 2^2 + \dots + 2^{n-2} \cdot 2^{n-1}) \\ &= \frac{1 \cdot (4^n - 1)}{4 - 1} + 2a_{n, 2} \\ &= \frac{4^n - 1}{3} + 2a_{n, 2} \end{aligned}$$

となることから,

$$a_{n, 2} = \frac{4^n - 2^{n+1} + 1 - \frac{4^n - 1}{3}}{2} = \frac{4^n - 3 \cdot 2^n + 2}{3}$$

(2) 関数

$$(2^0x + 1)(2^1x + 1)(2^2x + 1) \dots (2^{n-1}x + 1)$$

を展開したとき, 定数項は1である. また,  $x^k$  ( $1 \leq k \leq n$ ) の係数は,  $2^0, 2^1, 2^2, \dots, 2^{n-1}$  から異なる  $k$  個を選び, それらの積をとったものを  $k$  個の選び方すべてについて足し合わせたものに一致し, これは  $a_{n, k}$  に他ならない. ゆえに

$$(2^0x + 1)(2^1x + 1)(2^2x + 1) \dots (2^{n-1}x + 1) = f_n(x)$$

である。

このことから

$$\begin{aligned}f_{n+1}(x) &= (2^0x + 1)(2^1x + 1)(2^2x + 1) \cdots \cdots (2^{n-1}x + 1)(2^n x + 1) \\ &= f_n(x)(2^n x + 1)\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}f_{n+1}(x) &= (2^0x + 1)(2^1x + 1)(2^2x + 1) \cdots \cdots (2^{n-1}x + 1)(2^n x + 1) \\ &= (2^0x + 1) \cdot \{2^0(2x) + 1\} \{2^1(2x) + 1\} \cdots \cdots \\ &\quad \cdots \cdots \{2^{n-2}(2x) + 1\} \{2^{n-1}(2x) + 1\} \\ &= (x + 1)f_n(2x)\end{aligned}$$

ゆえに

$$\frac{f_{n+1}(x)}{f_n(x)} = \underbrace{2^n x + 1}, \quad \frac{f_{n+1}(x)}{f_n(2x)} = \underbrace{x + 1}$$

(3)  $a_{n+1, k+1}$  は  $f_{n+1}(x)$  の  $x^{k+1}$  の係数,  $a_{n, k}$  は  $f_n(x)$  の  $x^k$  の係数である。(2)の結果より,

$$f_{n+1}(x) = (2^n x + 1)f_n(x) \quad \cdots \cdots \textcircled{1}$$

$$f_{n+1}(x) = (x + 1)f_n(2x) \quad \cdots \cdots \textcircled{2}$$

①, ②において,  $x^{k+1}$  の係数を比較すると

$$a_{n+1, k+1} = 2^n a_{n, k} + a_{n, k+1} \quad \cdots \cdots \textcircled{3}$$

$$a_{n+1, k+1} = 2^k a_{n, k} + 2^{k+1} a_{n, k+1} \quad \cdots \cdots \textcircled{4}$$

③  $\times 2^{k+1}$  - ④ より

$$(2^{k+1} - 1)a_{n+1, k+1} = 2^k(2^{n+1} - 1)a_{n, k}$$

$$\frac{a_{n+1, k+1}}{a_{n, k}} = \frac{2^k(2^{n+1} - 1)}{\underbrace{2^{k+1} - 1}}$$

別解

(2) 集合  $X_{n, k}$  を

$X_{n, k}$ : 集合  $\{2^0, 2^1, \dots, 2^{n-1}\}$  から異なる  $k$  個を選んでその積を取ったもの全体からなる集合

と定義する. このとき,  $X_{n, k}$  の要素を全て足し合わせたものが  $a_{n, k}$  である.

$X_{n+1, k}$  の要素を  $2^n$  が選ばれているか否かで2つに分けたとき,  $2^n$  が選ばれているものの総和は  $2^n \cdot a_{n, k-1}$ ,  $2^n$  が選ばれていないものの総和は  $a_{n, k}$  であるから,

$$a_{n+1, k} = 2^n a_{n, k-1} + a_{n, k} \quad \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

が成り立つ. ここで,  $a_{n, 0} = 1$ ,  $a_{n, -1} = 0$ ,  $a_{n, n+1} = 0$  と定義すると,  $\textcircled{1}$  は  $0 \leq k \leq n+1$  の範囲で成り立つ.

以上から,

$$\begin{aligned} f_{n+1}(x) &= \sum_{k=0}^{n+1} a_{n+1, k} x^k \\ &= \sum_{k=0}^{n+1} (2^n a_{n, k-1} + a_{n, k}) x^k \\ &= 2^n x \sum_{k=0}^{n+1} a_{n, k-1} x^{k-1} + \sum_{k=0}^{n+1} a_{n, k} x^k \\ &= 2^n x \sum_{k=0}^n a_{n, k} x^k + \sum_{k=0}^n a_{n, k} x^k \\ &= (2^n x + 1) f_n(x) \end{aligned}$$

ゆえに

$$\frac{f_{n+1}(x)}{f_n(x)} = \underline{\underline{2^n x + 1}}$$

次に、 $X_{n+1, k}$  の要素を  $2^0$  が選ばれているか否かで2つに分けたとき、 $2^0$  が選ばれているものの総和は  $2^{k-1}a_{n, k-1}$ 、 $2^0$  が選ばれていないものの総和は  $2^k a_{n, k}$  であるから、

$$a_{n+1, k} = 2^{k-1}a_{n, k-1} + 2^k a_{n, k} \quad \cdots \cdots \textcircled{2}$$

が成り立ち、 $a_{n, 0} = 1$ 、 $a_{n, -1} = 0$ 、 $a_{n, n+1} = 0$  と定義すると、 $\textcircled{2}$  は  $0 \leq k \leq n+1$  の範囲で成り立つ。よって

$$\begin{aligned} f_{n+1}(x) &= \sum_{k=0}^{n+1} a_{n+1, k} x^k \\ &= \sum_{k=0}^{n+1} (2^{k-1}a_{n, k-1} + 2^k a_{n, k}) x^k \\ &= x \sum_{k=0}^{n+1} a_{n, k-1} (2x)^{k-1} + \sum_{k=0}^{n+1} a_{n, k} (2x)^k \\ &= x \sum_{k=0}^n a_{n, k} (2x)^k + \sum_{k=0}^n a_{n, k} (2x)^k \\ &= (x+1)f_n(2x) \end{aligned}$$

ゆえに

$$\frac{f_{n+1}(x)}{f_n(2x)} = \underline{\underline{x+1}}$$

(3)  $\textcircled{1}$ 、 $\textcircled{2}$  より

$$a_{n+1, k+1} = 2^n a_{n, k} + a_{n, k+1} \quad \cdots \cdots \textcircled{1}'$$

$$a_{n+1, k+1} = 2^k a_{n, k} + 2^{k+1} a_{n, k+1} \quad \cdots \cdots \textcircled{2}'$$

$\textcircled{1}' \times 2^{k+1} - \textcircled{2}'$  より

$$(2^{k+1} - 1)a_{n+1, k+1} = 2^k(2^{n+1} - 1)a_{n, k}$$

$$\frac{a_{n+1, k+1}}{a_{n, k}} = \frac{2^k(2^{n+1} - 1)}{\underbrace{2^{k+1} - 1}}$$

## 第5問

点  $(x, y, z)$  の原点  $O$  に関する位置ベクトルを  $\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$  と表す.

点  $(0, 0, 2)$  を  $B$  とする.

$S$  の底面上の点を  $Q(X, Y, 0)$  と表すと、このとき

$$X^2 + Y^2 \leq 1 \quad \dots\dots ①$$

を満たす.

実数  $\lambda$  ( $0 \leq \lambda \leq 1$ ) を用いて、 $S$  の側面上の点  $P$  の位置ベクトルは

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \overrightarrow{OB} + \lambda \overrightarrow{BQ} = \begin{pmatrix} \lambda X \\ \lambda Y \\ 2 - 2\lambda \end{pmatrix} \quad \dots\dots ②$$

と表せる.

(1)  $z = 1$  のとき、 $\lambda = \frac{1}{2}$  であり、 $x = \frac{1}{2}X$ 、 $y = \frac{1}{2}Y$  となるから、①より、 $z = 1$  上における  $S$  の切り口は

$$x^2 + y^2 \leq \frac{1}{4}, \quad z = 1$$

である.

また、実数  $\mu$  ( $0 \leq \mu \leq 1$ ) を用いて、 $T$  の側面上の点の位置ベクトルは

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \overrightarrow{OA} + \mu \overrightarrow{AP} = \begin{pmatrix} (1 - \mu) + \mu X \\ \mu Y \\ 2 - 2\mu \end{pmatrix}$$

と表せる.

$z = 1$  のとき,  $\mu = \frac{1}{2}$  であり,

$x = \frac{1}{2} + \frac{1}{2}X$ ,  $y = \frac{1}{2}Y$  となるから,

①より,  $z = 1$  上における  $T$  の切り口は

$$\left(x - \frac{1}{2}\right)^2 + y^2 \leq \frac{1}{4}, \quad z = 1$$

である.

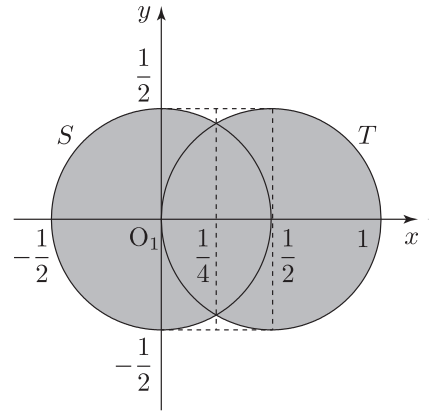
よって, 平面  $z = 1$  による  $S$ ,  $T$  の切り口を図示すると, 右図のようになる. ただし,  $O_1$  は点  $(0, 0, 1)$  を表す.

(2) 線分  $AP$  が通過する部分を  $U$  とする.

②より, 実数  $\nu$  を用いて,  $U$  上の点の位置ベクトルは,

$$\begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix} = \vec{OA} + \nu \vec{AP} = \begin{pmatrix} (1 - \nu) + \lambda\nu X \\ \lambda\nu Y \\ 2 - 2\lambda\nu \end{pmatrix}$$

と表せる.

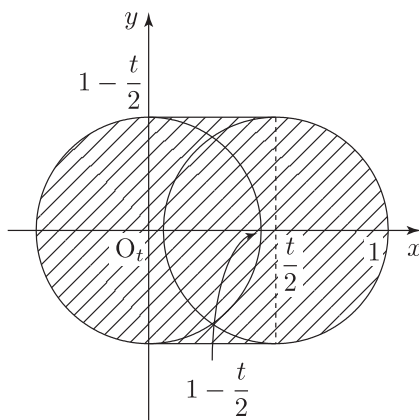


$z = t$  ( $0 \leq t \leq 2$ ) のとき,  $\lambda\nu = 1 - \frac{t}{2}$  であり, ①より,  $U$  の平面  $z = t$  における切り口は

$$\{x - (1 - \nu)\}^2 + y^2 \leq \left(1 - \frac{t}{2}\right)^2, z = t$$

である.

線分 AP と平面  $z = t$  が共有点をもつとき,  $1 - \frac{t}{2} \leq \lambda \leq 1$  であり,  $\nu$  は  $1 - \frac{t}{2} \leq \nu \leq 1$  を動くから, この円の中心  $(1 - \nu, 0, t)$  の  $x$  座標は  $0 \leq 1 - \nu \leq \frac{t}{2}$  の範囲を動く. このことに注意すると,  $U$  の平面  $z = t$  における切り口は右図のようになる. ただし,  $O_t$  は点  $(0, 0, t)$  を表す.



この切り口の面積を  $s(t)$  とおくと,

$$s(t) = \frac{t}{2} \cdot 2 \left(1 - \frac{t}{2}\right) + \pi \left(1 - \frac{t}{2}\right)^2$$

であるから, 求める体積は

$$\begin{aligned} \int_0^2 s(t) dt &= \frac{1}{2} \int_0^2 t(2-t) dt + \pi \int_0^2 \left(1 - \frac{t}{2}\right)^2 dt \\ &= \frac{1}{2} \cdot \frac{1}{6} (2-0)^3 - \frac{2}{3} \pi \left[ \left(1 - \frac{t}{2}\right)^3 \right]_0^2 \\ &= \frac{2}{3} + \frac{2}{3} \pi \end{aligned}$$

である.



## 第6問

(1)  $f(\theta) = A \sin 2\theta - \sin(\theta + \alpha)$  とおく.  $A > 1$  より

$$f\left(\frac{\pi}{4}\right) = A - \sin\left(\frac{\pi}{4} + \alpha\right) > 0$$

$$f\left(\frac{3}{4}\pi\right) = -A - \sin\left(\frac{3}{4}\pi + \alpha\right) < 0$$

$$f\left(\frac{5}{4}\pi\right) = A - \sin\left(\frac{5}{4}\pi + \alpha\right) > 0$$

$$f\left(\frac{7}{4}\pi\right) = -A - \sin\left(\frac{7}{4}\pi + \alpha\right) < 0$$

であり, 関数  $f(\theta)$  は連続な関数であるから, 方程式  $f(\theta) = 0$  は  $\frac{\pi}{4} < \theta < \frac{3}{4}\pi$ ,  $\frac{3}{4}\pi < \theta < \frac{5}{4}\pi$ ,  $\frac{5}{4}\pi < \theta < \frac{7}{4}\pi$  のそれぞれの範囲に少なくとも1個の解をもつ.

次に,  $f(0) = f(2\pi) = -\sin \alpha$  である.  $f(0) > 0$  と仮定すると,  $\frac{7}{4}\pi < \theta < 2\pi$  の範囲に少なくとも1個の解をもつ.  $f(0) < 0$  ならば,  $0 < \theta < \frac{\pi}{4}$  の範囲に少なくとも1個の解をもつ. 最後に  $f(0) = 0$  ならば,  $\theta = 0$  が解である. よって, 方程式  $f(\theta) = 0$  は  $0 \leq \theta < 2\pi$  の範囲に少なくとも4個の解をもつ.

(2)  $Q(\sqrt{2} \cos \theta, \sin \theta)$  ( $0 \leq \theta < 2\pi$ ),

$P\left(\frac{u}{\sqrt{2}} \cos p, u \sin p\right)$  ( $0 \leq p < 2\pi, u \geq 0$ ) とおくことができる.

点  $Q$  における  $C$  の接線の方程式は

$$\frac{\cos \theta}{\sqrt{2}} x + (\sin \theta) y = 1$$

であるから, この接線の法線ベクトルを  $\vec{v}$  とすると

$$\vec{v} = \left( \frac{\cos \theta}{\sqrt{2}}, \sin \theta \right)$$

である。また

$$\overrightarrow{PQ} = \left( \sqrt{2} \cos \theta - \frac{u}{\sqrt{2}} \cos p, \sin \theta - u \sin p \right)$$

である。  $\vec{v}$  と  $\overrightarrow{PQ}$  が平行であることから

$$\frac{\cos \theta}{\sqrt{2}} \cdot (\sin \theta - u \sin p) - \sin \theta \cdot \left( \sqrt{2} \cos \theta - \frac{u}{\sqrt{2}} \cos p \right) = 0$$

であり、三角関数の加法定理を用いて整理すると

$$\sin 2\theta - 2u \sin(\theta - p) = 0 \dots\dots(*)$$

である。一方、(1)の  $f(\theta) = 0$  は、 $A \neq 0$  より

$$\sin 2\theta - \frac{1}{A} \sin(\theta + \alpha) = 0$$

と変形できる。さらに、 $A > 1$  より  $\frac{1}{A} < 1$ 。(1)の  $\alpha$  は任意の実数であるから、 $p$  の値によらず  $2u < 1$ 、すなわち  $u < \frac{1}{2}$  のとき、 $\theta$  の方程式(\*)は少なくとも4個の解をもつ。よって、 $r = \frac{1}{2}$  とすると、条件を満たすため、 $r$  の存在性が示された。

最後に、 $r = \frac{1}{2}$  が条件をみたす  $r$  のうち最大になることを示す。 $r > \frac{1}{2}$  とする。このとき、ある点  $P$  に対して、対応する  $\theta$  が4個未満になることを示せばよい。 $u = \frac{1}{2}$ 、 $p = \frac{3}{4}\pi$  のときを考える。これを(\*)に代入すると

$$\sin 2\theta - \sin \left( \theta - \frac{3}{4}\pi \right) = 0$$

である。和積の公式から

$$\sin \left( \frac{\theta}{2} + \frac{3}{8}\pi \right) \cos \left( \frac{3}{2}\theta - \frac{3}{8}\pi \right) = 0$$

$$\sin \left( \frac{\theta}{2} + \frac{3}{8}\pi \right) = 0 \text{ または } \cos \left( \frac{3}{2}\theta - \frac{3}{8}\pi \right) = 0$$

であり,  $0 \leq \theta < 2\pi$  に注意すると

$$\frac{\theta}{2} + \frac{3}{8}\pi = \pi \text{ または } \frac{3}{2}\theta - \frac{3}{8}\pi = \frac{\pi}{2}, \frac{3}{2}\pi, \frac{5}{2}\pi$$

$$\theta = \frac{7}{12}\pi, \frac{5}{4}\pi, \frac{23}{12}\pi$$

である. このように  $\theta$  の値が 3 個しかないため,  $r > \frac{1}{2}$  のとき, 条件をみたさない. したがって,  $r$  の最大値は  $\frac{1}{2}$  である.